

過疎地域における高齢者「閉じこもり」と身体活動環境要因の関連の検討

スポーツビジネス研究領域

5011A012-5 井上 壽尚

研究指導教員：間野 義之 教授

I. 緒言

我が国の高齢者人口は増加の一途を辿っており、それに伴って増え続けているのが要介護認定者数である。なかでも要介護状態までにはいかないものの家事や身の回りの支度などの日常生活に支援を必要とする「要支援者」の増加は顕著である。厚生労働省では介護予防を進めていくための6つの強化すべき分野を設定しており、そのなかのひとつに「閉じこもり予防・支援」が挙げられている。

「閉じこもり」は身体的、心理的、社会・環境要因の3つが相互に関連して引き起こされると提唱されており、「閉じこもり」予防・支援には高齢者に対する身体活動の促進が必要であると考えられている。

これまで身体活動量を規定する要因として近隣環境（歩道、安全性、施設など）との関連性が明らかにされてきたが、「閉じこもり」は寝たきりにも「非閉じこもり」にもなることが明らかにされており（藺牟田ほか、1998）、「閉じこもり」に対して何らかの環境の変化を与えることは「閉じこもり」改善に効果的であると推測されるため、「閉じこもり」予防・支援のための身体活動の促進という観点においても、環境要因からアプローチしていく必要性があるといえよう。

これまで行われてきた「閉じこもり」に関する研究は、「閉じこもり」者の体力についての研究の他に、「閉じこもり」者の身体・心理・社会的特徴について明らかにした研究や「閉じこもり」発生に影響を与える要因についての研究など、個人レベル

の要因に関するものが多い。一方で地域レベルでの要因の関連について明らかにした研究はあまり行われておらず、他地域での再現性が低かったり、人口密度のみで地域を分類していたりするという課題がある。そのため他地域での再現性を担保し、より詳細に地域の特徴を検討するために、信頼性の高い環境尺度を用いて地域レベルの要因を検討することが必要であると思われる。

本研究では、高齢者の身体活動を促進することで「閉じこもり」を予防・支援するという観点に立ち、「閉じこもり」と身体活動環境要因の関連を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

過疎化・高齢化の進んでいるA県B村及びC村の65歳以上住民全員（計1406人）を対象として訪問留置・郵送法による質問紙調査を行った。

調査項目は、人口統計学的特性（性別、年齢、同居人数）、一週間の外出回数、健康状態に対する4段階での自己評価、近隣身体活動環境要因として国際標準化身体活動質問紙環境尺度（IPAQ-E）から抜粋した7項目とした。

本研究における「閉じこもり」の定義は『65歳以上で外出頻度が週1回以下かつ「どちらかといえば健康でない」以上の健康状態である者』とした。

統計解析は、「閉じこもり」群と「非閉じこもり」群の間に性別・年齢・同居者の有無ごとに差があるかを検討するためにそれぞれカイ二乗検定を行った。続いて、「閉

じこもり」群と「非閉じこもり」群の2群と身体活動環境要因の関連をカイ二乗検定によって検討した。最後に、「閉じこもり」の有無を従属変数、身体活動環境要因を独立変数とした二項ロジスティック回帰分析（変数減少法、尤度比）を用いてオッズ比と95%信頼区間を算出した。なお、身体活動環境要因の結果はすべて2群に分類（あてはまるか否か）し、統計学的有意水準は危険率5%未満に設定した。

Ⅲ. 結果

「閉じこもり」状況及び人口統計学的要因との関連は表1の通りである。「閉じこもり」は194人中33人(17.0%)で、「閉じこもり」と人口統計学的要因の関連では、女性であることと末期高齢者であることが有意に関連していた。

表1 閉じこもり状況					
	閉じこもり		非閉じこもり		χ^2
	n	%	n	%	
全体	33	17.0	161	83.0	
性別					6.234 *
男性	11	10.7	92	89.3	
女性	22	24.2	69	75.8	
年代					34.017 ***
前期高齢者	10	8.8	103	91.2	
後期高齢者	11	17.7	51	82.3	
末期高齢者	12	63.2	7	36.8	
同居者					1.672
有	27	19.1	114	80.9	
無	6	11.3	47	88.7	

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

「閉じこもり」と身体活動環境要因の関連をカイ二乗検定・二項ロジスティック回帰分析を用いて検討した結果は表2・表3の通りである。近所に運動場所がないと認知されていること、犯罪や夜間における安全性が低いと認知されていること、自動車・オートバイを保持していないことがそれぞれ「閉じこもり」と関連していた。

表2 身体活動環境要因における「閉じこもり」「非閉じこもり」で分類した割合					
	非閉じこもり		閉じこもり		χ^2
	n	%	n	%	
身体活動環境要因					
近所のバス停・駅					3.30
無	47	85.5	8	14.5	
有	114	82.0	25	18.0	
近所の運動場所					6.156 *
無	60	75.0	20	25.0	
有	101	88.6	13	11.4	
近所の安全性(犯罪-夜間)					4.770 *
安全でない	27	71.1	11	28.9	
安全	134	85.9	22	14.1	
歩行時の近所の安全性(交通量)					2.030
安全でない	12	70.6	5	29.4	
安全	149	84.2	28	15.8	
運動実施者を見かける					2.772
低	72	78.3	20	21.7	
高	89	87.3	13	12.7	
近所の景観					9.949
低	54	79.4	14	20.6	
高	107	84.9	19	15.1	
自動車・オートバイ保持					5.169 *
無	16	66.7	8	33.3	
有	145	85.3	25	14.7	

*p<0.05

表3 閉じこもり群と関連する要因			
	閉じこもり		
	OR	(95%CI)	
身体活動環境要因 ^{a)}			
近所の運動場所			
無	1	(ref)	
有	0.361	(0.162-0.807)	*
近所の安全性(犯罪-夜間)			
安全でない	1	(ref)	
安全	0.341	(0.142-0.819)	*
自動車・オートバイ保持			
無	1	(ref)	
有	0.369	(0.139-0.983)	*

a)変数減少法(尤度比)によって残存した変数 *p<0.05

Ⅳ. 考察

「近所の運動場所」の有無が「閉じこもり」発生に関連していたことについて、高齢者の身体活動の実施と近所の運動場所の有無が関連しており、その結果として「閉じこもり」の有無と「近所の運動場所」が有意な関連を示したものと思われる。

「近所の安全性(犯罪-夜間)」と「閉じこもり」に関連が見られたが、これまで身体活動と「近所の安全性」の関連は明らかにされていないため、さらなる知見の蓄積が必要であろう。

「自動車・オートバイ」を保持していないことと「閉じこもり」の間に関連が見られたことについては、A県B村・C村が中山間地域に位置しているため自動車・オートバイを所有していないことが外出に対してネガティブな影響を与えていたと考えられる。

Ⅴ. 結論

高齢者の「閉じこもり」と身体活動に関する環境要因の関連を単変量および多変量解析によって検討した結果、「閉じこもり」との関連が明らかになった身体活動環境要因は、近所に運動場所がないと認知されていること、犯罪や夜間における安全性が低いと認知されていること、自動車・オートバイを保持していないことであった。